



山田堰から水を引く堀川の右岸にある朝倉の三連水車

豊作を願う筑後川の井堰3兄弟

河村 明 Akira Kawamura

正会員 工博 九州大学大学院工学研究科環境システム科学研究センター 助教授

蛇口を開くと当然の如く水が出てくる。福岡都市圏の場合このおよそ3分の1は流域外の筑後川から導水しているが、残念ながらこのことは福岡都市圏住民の間では余り知られていないようである。

筑後川は、幹線流路延長143km、流域面積2860km²で、その流域は熊本、大分、福岡、佐賀の4県にまたがる九州随一の大河川である。筑後川はまた、「筑紫次郎」の愛称で呼び親しまれ、関東・利根川の「板東太郎」、四国・吉野川の「四国三郎」とともに、だんご3兄弟ならぬ暴れ川3兄弟の次男坊の座を占めている。筑後川の歴史は洪水との闘いの歴史であるが、同時に日照りが続くと干ばつが頻発する流域でもあった。

現在、筑後川には約30の堰（建設省直轄区内）があるが、中でも上流より大石堰、山田堰、恵利堰は筑後川の三大井堰と呼ばれ、この井堰3兄弟による灌漑用水の取水こそが日本有数の穀倉地帯・筑後平野を築きかけとなったのである。実をいうとかつては、大石堰のさらに上流（1954年に完成した夜明ダムの上流1100m

地点）の、現在は夜明ダムの貯水のために水没した袋野堰（1676年築造）を含めて4兄弟であった。これらの井



位置図



右岸側から見た大石堰

堰は、中流域の約20kmという短い区間に設置され、建設時期も約50年間という短期間に集中している。

大石堰の築造経過を述べると以下ようになる。

筑後川左岸の生葉郡（現在の浮羽郡）以西の土地は、筑後川が目の前にありながら、土地が高いため水を引くことができず、平野の大部分は藪か林であった。農民はその間々を開墾して畑作を主として生計をたてていたが、その生活は貧困そのものであった。その頃、高田村の山下助左衛門をはじめとする五人の庄屋は、筑後川より水門を設けて導水すれば、畑地の水田化ができ、既存の水田の水不足も解消できると考えていた。ちょうどその時、寛文三年（1663年）の干魃被害を視察に来ていた久留米有馬藩の郡奉行高村権内にその計画案を熱心に陳情した。紆余曲折の末、詳細な設計図などが藩庁に提出されたが、これに対し上流の村の庄屋連が、洪水時に甚大な被害を被る危険性があるとの理由で建設に反対した。これに対し「万一損害を与えた際は、誓ってわれわれが責任を負い、どんなお仕置きも受けてよい」と書面で弁明保証している。また、工事にあたり計画通り導水が成功しなかった場合は、磔刑に処す旨を申し渡され、五庄屋は「当然乍ら誅罰を甘受する」と覚悟のほどを示し工事は着工された。工事は藩営事業として行われ、有馬藩の丹波頼母が藩命により工事最高責任者となって監督を行った。文献によると、工事の間実際に五箇のはりつけ道具が長野村の出入口の建て並べていたらしい。このことが、農民に「庄屋どんを殺すな」とばかり激励となり、昼夜休まず工事は続けられ、工事は予想外に進捗し、予定より早く、寛文四年（1664年）三月中旬に見事に完成した。起工から竣工まで延べ四万人を要し、その期間は僅かに六十日余りであった。

なお、この第一期工事では筑後川支川の隈ノ上川の長野堰は築造されたが、筑後川本流を両岸まで堰止める大石堰はまだなく、大石堰が築造されるのは、延宝二年



山田石堰の航空写真

（1674年）のことである。その大石堰も昭和28年（1953年）の筑後川の大洪水で大破して、根本的大修理が行われ、今日の大石堰は鉄筋コンクリートに変わり昔の面影はほとんどなくなっている。

山田堰（堀川用水）は、寛文四年（1664年）に築造され、筑後川右岸より取水する福岡黒田藩の石堰である。当時の山田堰は突堤型であったが、これが筑後川全体を斜めに堰止める本格的な山田石堰に改修されたのは、それから126年後の寛政二年（1790年）のことである。その後いくども堰は流されては修復された。最近では昭和55年（1980年）の集中豪雨で流されたが、自然石を使って修復され、現在もその幅広く積まれた石堰の上を水が勢いよく流れる勇姿に感動を感じるのには私だけではないであろう。

この山田堰から水を引いている堀川の右岸（現朝倉町）は、土地が高いためその用水の利用が不可能であった。しかし、水を汲み上げる二連、三連の水車3基が、寛政元年（1789年）頃設置され水田化が可能となった。爾来二百年以上にわたって6月中旬から10月初旬まで、水田に水を送り続けているのである。これらは現在、国の史跡、県の民俗文化財にも指定されていて、町の観光資源としても認識されるようになってきている。

末っ子の恵利堰（床島用水）は右岸の有馬藩用で、紙面の都合上、藩間の激しい争いなどは割愛するが、最終的に正徳二年（1712年）に工事が開始された。築堰は現場が急流のため基礎工事ができず困難を極めたが、思案の結果、石材を数隻の船に積み、船もろ共に水底に沈めて基礎とする方法を考え出し、堰への完成へと導いたのである。

取材協力・写真提供：建設省筑後川工事事務所

参考文献：

- 1 近本喜續：筑後川の四大井堰、発行年不詳
- 2 山田堰土地改良区：山田井堰堀川三百年史、1967
- 3 大石堰土地改良区：大石長野水道沿革誌、1957